

東京都美術館ニュース

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No. 481

Interview

中野信子

NAKANO Nobuko



脳科学者としての視点から、社会現象や人間の行動、文化などをわかりやすく解き明かすことで定評のある中野信子さん。最近では東京藝術大学大学院でキュレーションについて学び、美術研究者としても活躍の場を広げています。そんな中野さんにアートの魅力や楽しみ方についてうかがいました。

NAKANO Nobuko is known for elucidating social phenomena, human behavior, and culture in an easy-to-understand manner from her perspective as a brain scientist. Seeking to expand her activities as an art researcher, she recently studied curation at the graduate school of Tokyo University of the Arts. We asked her about the appeal of art and how to enjoy it.

根底にあるのはアーティストへの尊敬と憧れ

子どもの頃から絵を見るのも描くのも好きで、美術作品のカレンダーから絵や写真を切り抜いては眺めているような子でした。中学からは美術部に入部し、大学受験の直前まで油絵を描き続けるほど打ち込んでいました。アーティストを尊敬し、東京藝術大学への憧れはあったものの、芸術で生きていけるほどの自信はなかったもので、東京大学を選びました。

今でもいろいろなジャンルのアートを見ますし、好きな作家も多岐にわたりますが、2003年にサイ・トゥオンブリーの作品と出会ったのがきっかけで、コンテンポラリーアートが好きになりました。トゥオンブリーは《Untitled》という作品をいくつも残しているのですが、その一つにムラのある灰色一色の絵があります。その絵から私がイメージするのは、夕立で車のフロントガラスに激しく雨があたった時、向こう側に暗い灰色の空が見えてくるような光景。この灰色の中には物語がたくさんあるんだろうな、しめっぽくてエモいな(笑)、と。作品としての美しさもありながら、とてもシンプルな表現で多くの言葉を語ることができる人なんだと胸を打たれました。

また、生と死の狭間を表現するクリスチャン・ボルタンスキーも好きな作家の一人。瀬戸内海に浮かぶ豊島には、ボルタンスキーが世界中の人々の心臓音を集めた「心臓音のアーカイブ」があり、心が揺さぶられる体験をしました。

一つの作品から物語を何通り想像できるか

美術館を訪れた時、解説や来歴といった作品情報は必ず読むようにしています。というのも、同じ作品に対し、従来はこういう見方だったけれど別の解釈が出てきた、またはエックス線分析等で新たな事実がわかった、など次々に出てきますよね。時を経て判明した新解釈や新

キュレーターの語源は「癒やす、育てる」こと。
あなたの鑑賞体験が「キュレーション」になる、
そんな風に美術館を楽しんでみてください。

The original meaning of curator is "to heal, to nurture." Our experience of art at the museum is "curation." Please enjoy the museum with this in mind.



中野 信子（なかの・のぶこ）

1975年東京都生まれ。脳科学者、医学博士、認知科学者。東京大学工学部卒業、同大学院医学系研究科博士課程修了。フランス国立研究所ニューロスピンに勤務後に帰国、現在は東日本国際大学、京都芸術大学で教鞭を執る傍ら、メディアにおいてコメンテーターや脳科学に関する解説を行う。2022年森美術館理事に就任。2025年3月東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修了。著書に『新版 科学がつきとめた「運のいい人」』（サンマーク出版）、『感情に振り回されないレッスン』（プレジデント社）、『脳から見るミュージアム』（共著、講談社）、『悩脳（のうのう）と生きる 脳科学で答える人生相談』（文藝春秋）ほか多数。



事実はトリビアとしてもおもしろいし、新事実がわかるまでなぜそういう解釈だったのか、その背景なども知ることができるからです。

さらに、時間や心に余裕がある時は「この大きなキャンバスにしたのはなぜ?」「どうしてここにこの色?」「このモチーフを使った意味は?」などと次々に問いを立て、自分なりにその答えを考えながら鑑賞しています。額装に注目したり、ほかの人が気がつかないようなポイントをあえて探してみたりも。つまり、“一つの作品からどれだけの情報を得られるかゲーム”のようなものを楽しんでいる感覚です。

また、一枚の絵から何通りもの物語を想像してみるのもおもしろい。それが事実でなくてもいいのです。そうすることによって鑑賞の楽しみが2倍にも3倍にも増え、脳も喜びます。皆さんに

もこういった楽しみ方を試していただきたいですね。

美術館に行く皆さんもキュレーターの視点を

私はこの春まで、科学とアートとの関係、そしてキュレーションについて東京藝術大学大学院で研究をしていました。そもそもキュレーション（curation）は、特定のテーマに沿って作品を分類・収集し、あらゆる側面から展示を構成していくことで、それを専門としているのがキュレーター（curator）。日本では学芸員といわれることが多いのですが、curationもcuratorもラテン語のクラーレ（curare＝世話をする、癒す、育てる）が語源。この語源から考えるとキュレーターは、キュレーションという作業を通じて、作家を育てたり、作家の生み出す作品が社会を癒

し育てたりするのに寄与する仕事といえます。

そして私はキュレーターのような専門職でなくとも、美術館に行く皆さんにはその役割が担えると思っています。作品を見て、「よかった」「きれいだっただ」と感じるそこから一步踏み込んで、「アーティストはこういう思いで描いたのかも…」「キュレーターがこの配置にしたのはこういう意図があるのかな」などという見方をして、自分なりの感想を添えて、美術館での体験をほかの方に語っていただきたい。そうやって発信することは、広い意味でキュレーションといえるのではないのでしょうか。鑑賞される皆さんも社会の豊かさを育てている一人だという認識でいると、美術館をまた違った視点で楽しめると思います。

ゴッホ展への期待

東京都美術館では昨年、「田中一村展 奄美の光 魂の絵画」を拝見しました。注目される前から大好きで、もともと素敵、好きと思っていた作家の展覧会が開催されるというのは嬉しいものですね。生前は世俗的な栄達とは無縁だった作家ですが、近年のキュレーターの研究の成果もあり、色褪せない一村の絵画の魅力を堪能しました。

9月からは「ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢」が開催されるのです。ゴッホの死後、画家としてきちんと評価されるように、弟のテオやテオ亡き後、妻のヨーが奔走し、やがてゴッホの作品が日の目を見たことを考えると、テオたち家族がいわばキュレーターとして大事な役割を担っていたようにも思います。

ゴッホに関する展覧会はいろいろなコンセプトでみせていただけていますが、今回はファン・ゴッホ家が守り、大事に受け継いできたファミリー・コレクションが見られるとあって、注目度も高いですね。また混むことは覚悟して(笑)、足を運ぼうと思っています。

start

I came to like contemporary art through my encounter with Cy Twombly's work. Christian Boltanski, who expresses the intersection of life and death, is also a favorite artist.

New interpretations of artworks often emerge, and new facts may be revealed by X-ray analysis, so when visiting a museum, I always read the commentaries and provenance information. I also recommend that you imagine various narratives behind a painting as an interesting way to discover it.

Until this spring, I was researching curation in graduate school. Curation means classifying, gathering, and devising exhibits for artworks under a specific theme, this being the specialized skill of a curator. Both words derive from the Latin word *curare*, meaning to care for, to heal, to nurture. A curator's job, in other words, is to contribute to artists' development and to society's healing and enrichment through the work of curation.

Everyone who goes to the museum can also play this role. Rather than simply thinking, "That was nice," please ask yourself, "Was that the curator's intention when configuring the exhibit, I wonder?" and bring your own impressions into play, and also discuss the works with others. I want you to recognize that you too are helping foster richness in society.

From September, the exhibition "Van Gogh's Home: The Van Gogh Museum. The Painter's Legacy, the Family Collection, the Ongoing Story" will be held. Considering how Van Gogh's family struggled to bring public attention to his paintings, after his death, I think they played a role as curators. I plan to attend, keeping in mind that this high-profile exhibition is going to be crowded.



ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢

Van Gogh's Home: The Van Gogh Museum. The Painter's Legacy, the Family Collection, the Ongoing Story

会期

2025年9月12日(金)～12月21日(日)

展覧会公式サイト

<https://gogh2025-26.jp/>

展覧会の舞台裏

Creating Exhibitions

ギャラリーA・B・Cを会場に、7月24日(木)より企画展「つくるよこび 生きるためのDIY」を開催しています。DIY(Do It Yourself/自分でやってみる)の手法や考え方に関心を寄せる5組6人の現代作家と2組の建築家による展覧会です。今回は、つくることやDIYをテーマにした本展の企画意図や出品作家についてご紹介します。

A Thematic Exhibition, "Pleasure in Making: The Creative Spirit of DIY for Living," will be held in Galleries A, B, and C from July 24 (Thu). Featured will be four artists, one artist duo, and two architect teams who are interested in the thinking behind DIY (Do It Yourself) and the possibilities of its methods. Here, we look at the intent of this exhibition focused on creation and DIY, and introduce the artists and architects featured.

よりよく生きるためのDIY

DIY for "better living"

2025年夏の企画展では、誰もが持つ創造性に目を向け、DIY(Do It Yourself/自分でやってみる)をテーマに、現代作家と建築家による展覧会「つくるよこび 生きるためのDIY」を開催しています。

本展の構想が始まったのは、2021年頃。新型コロナウイルスが私たちの暮らしに大きな影響を及ぼしていた時期でした。外出を控え、多くの時間を自宅で過ごしたことは記憶に新しく、暮らしをよりよくするために、大掃除や日曜大

工、裁縫、手作りマスクの制作など、家の中でさまざまな創意工夫が生まれました。そうしたなかで「DIY」というキーワードが浮かび上がり、本展の企画が始まりました。

本展ではDIYを「目の前の問題を自らの工夫で解決するアプローチ」と捉えます。DIYの考え方や手法を参照点とし、7組の出品作家の作品を通じて、「よりよく生きる」ための素朴な思いから生まれる創造性に注目しています。出品作家の多くは必ずしも作品をDIYと明言している



ダンヒル & オブライエン
《装置：ムーアの木槌 V1》
2024年

Dunhill and O'Brien,
Apparatus: Moore's Mallet V1,
2024



野口健吾《庵の人々 東京都渋谷区》
2011年 ラムダプリント

Kengo Noguchi, *The Ten Foot Square Hut*,
Shibuya-ku Tokyo, 2011,
Lambda C-type print

わけではありませんが、作家と対話を重ね、展示の構成を練っていくなかで、それぞれの作品に宿るDIYの精神やアプローチがより明確に見えてきました。

木版画作家の若木くるみは、身の回りの日用品を版として使い、さまざまな版の特性と自身のイメージーションを融合させた世界を和紙に転写し、作品を制作しています。瀬尾夏美は、2011年の東日本大震災を受けて災禍の土地を自ら歩き、ドローイング、言葉、写真を通じて人々や風景を記録してきました。多くを失っても、「片づける」「耕す」「花を植える」「物語を編む」といった営みによって新たな暮らしを立ち上げる人々の姿や、そこに創造性の根源が宿ることに瀬尾は注目しています。写真家の野口健吾は、さまざまな事情で住まいを失い、路上で暮らす人々が雨風をしのぐために建てた「庵」に、生きるためのDIYや、廃品によるブリコラージュとも言える創意工夫を見出してきました。ダンヒル&オブライエンは、素材の重量や制約と向き合う近代彫刻を「最も不便な芸術の形」と捉え、DIY的な造形や共同制作に挑戦しています。久村卓は大学で彫刻を学んだ後、心身ともに「軽さ」を重視する制作を模索し、ハンドメイド

やクラフトなど、美術の周縁に位置する技法や素材を積極的に採り入れています。伊藤聡宏設計考作所とスタジオメガネ建築設計事務所は、多様な人が関われる場づくりを、DIY的な実践として展開してきました。

こうした7組のアーティストと建築家による本展が、鑑賞者それぞれの暮らしの中に芽生える「よりよく生きる」ためのDIYや、つくるに伴う根源的なよろこびを見つめ直すきっかけとなれば幸いです。（東京都美術館 学芸員 藤岡勇人）

The Tokyo Metropolitan Art Museum will present "Pleasure in Making: The Creative Spirit of DIY for Living" as its Thematic Exhibition for summer 2025. Featured, under the theme of DIY (Do It Yourself), will be six contemporary artists (four solo artists and an artist duo) and two architect teams. The exhibition was conceived around 2021 during the COVID-19 epidemic, a time when people were rethinking their lifestyles and employing ingenuity in their lives. Through artworks by the featured creators, the exhibition will explore DIY as "an approach of applying our own ingenuity to the problems before us" and focus on creativity that leads to "better living." Their diverse expressive methods include prints created using household items, drawings that document the post-earthquake landscape, photos of huts built by homeless people using scrap materials, installations by sculptors, and architectural spaces created with the involvement of many different people. The featured artists may not necessarily use the expression "DIY" in their practices, yet the DIY spirit and approach is readily apparent in their work. It is hoped the exhibition will give viewers opportunities to think about DIY for "better living" and the pleasure to be found in making things.

(FUJIOKA Hayato, Curator)

人と作品、人と人、人と場所をつなぐ

Art Communication

美術館が作品を鑑賞する場にとどまらず、鑑賞を「体験」として、より深める場所になるように、さまざまなアート・コミュニケーション・プログラムを展開しています。今回は、東京都美術館の収蔵品である野外彫刻を活用した取り組みについて紹介します。

The Museum offers Art and Communication projects designed to take visitors beyond simple viewing to a deeper "experience" of the artworks. This time, we look at programs giving application to outdoor sculptures in the Museum's collection.

野外彫刻から広がる鑑賞の場づくり

Using outdoor sculptures to expand opportunities for art appreciation



とびらプロジェクトとは、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクトです。都美を拠点に東京藝術大学と連携して行い、一般公募されたアート・コミュニケータ（愛称：とびラー）が、学芸員、大学教員らと共に活動しています。

Tobira Project is a social design project to foster community through art, with the art museum as a base. In cooperation with Tokyo University of the Arts, art communicators (called Tobira) selected from the general public undertake museum-based activities in collaboration with curators and university faculty.

野外彫刻とは？

What is outdoor sculpture?

東京都美術館の正門から美術館内に向かう屋外広場（エスplanナード）には、10点の彫刻作品を常時展示しています。

10 works of sculpture are permanently displayed on the Esplanade from the Main Gate to the Museum Entrance.

いろいろな視点で野外彫刻を楽しもう！

Enjoy seeing outdoor sculptures from many perspectives!

東京都美術館には、10点の野外彫刻があることをご存じですか？アート・コミュニケータ（とびラー）の活動では、これらの彫刻作品を様々な方と鑑賞する機会を大切にしています。2024年秋に開催した「東京都美術館の野外彫刻を楽しむ」は、とびラーが発案・企画したプログラムです。「彫刻鑑賞って難しそう」と身構えてしまう方でも、よく見て考える体験を通して、彫刻に親しんでもらうことを目的に実施しました。2回の開催に小学生から大人まで、計25名が参加しました。

当日は自己紹介をした後、小さな木や石で立体をつくるゲームから活動がスタート。お互いの作ったものを観察すると、思いがけない発想が生まれて、いつのまにか全員が笑顔で会話していました。その後は4～5人のグループに分かれて、館内にある3つの野外彫刻をじっくり鑑賞します。改めて見てみると、シンプルな印象の作品でも、複雑なかたちをしていることに気がつきます。「なぜこのかたちなんだろう？」「今日の天気ではこうみえるけど…」「実はこんな表現なのかも!」と、新しい発見や解釈が自然と重なり、2時間のプログラムが終わる頃には「もっといろんな彫刻に注目したい!」



「東京都美術館の野外彫刻を楽しむ」実施の様子 Scene of "Enjoying the Tokyo Metropolitan Art Museum's Outdoor Sculptures"

井上武吉《my sky hole 85-2 光と影》1985年／堀内正和《三つの立方体 A》1978年／最上壽之《イロハニホトテリヌルヲフカヨヲテソツネ・・・》1979年

と目を輝かせる参加者の姿がありました。

このほかにも、とびラーは学校の授業で訪れる子どもたちと一緒に鑑賞したり、建築ツアーのなかで建物とあわせて紹介したりするなど、様々な場面で野外彫刻に親しんでいます。同じ作品でも、学びの目的や出会う人が違うことで、新しい鑑賞体験へと展開し続けるのです。

また、これらの野外彫刻は、年に1回ほど、専門家の指導のもとで学芸員やとびラーが力

を合わせて洗浄を行っています。1日かかりの大仕事ですが、洗うプロセスにも学びがあり、素材の特性や保存方法にも理解を深めながらメンテナンスをしています。

その日の天候や、景観との調和を楽しめるのも、野外彫刻のおもしろいところです。展示会の行き帰り、ぜひ足を止めてお気に入りの1点を探してみてくださいね。

(東京都美術館 学芸員 峰岸優香)



野外彫刻洗浄の様子 Scene of washing an outdoor sculpture

五十嵐晴夫《メビウスの立方体》1978年
井上武吉《Plus and Minus No.55》1975年

東京都美術館の野外彫刻マップ

<https://www.tobikan.jp/archives/collection.html>

Tokyo Metropolitan Art Museum's Outdoor Sculptures and Reliefs Map

<https://www.tobikan.jp/en/archives/collection.html>



The activities of the art communicators (Tobira) include programs for appreciating the Museum's outdoor sculptures with others. "Enjoying the Tokyo Metropolitan Art Museum's Outdoor Sculptures" held in fall 2024 was such a program conceived and planned by the Tobira. It sought to familiarize participants with sculpture by giving them experiences of closely viewing and thinking about actual sculptures. The program was held twice with a total 25 people participating. Both children and adults enjoyed two hours of viewing the sculptures while holding dialogue.

These outdoor sculptures are cleaned under the guidance of experts about once a year. Curators and Tobira maintain the sculptures while striving to deepen their understanding of their materials and how to preserve them.

When visiting the Tokyo Metropolitan Art Museum, try to discover your favorite outdoor sculpture.

(MINEGISHI Yuka, Curator, Learning and Public Projects)

公募団体・学校教育展

東京都美術館は、年間約260団体の展覧会が開催される「公募展のふるさと」です。美術団体や学校教育機関などが作る新しい作品との出会いの場をさまざまなトピックをご紹介します。

The Tokyo Metropolitan Art Museum is "the home of the public entry exhibition."
Each year, some 260 groups hold exhibitions here. Visitors can enjoy encounters with new works by art groups and school education institutions, presented under a wide range of topics.

「『推し』の作家、
公募展を見つけよう！」
"Discover your oshi ('fave') artist or art group!"



公募展示室の展示風景（行動美術協会「第16回 行動美術TOKYO展」 2025年3月）

Public Entry Exhibition, gallery view ("KOHDO BIJUTSU TOKYO ART EXHIBITION," KOHDO BIJUTSU ASSOCIATION, Mar. 2025)

当館で開催している展覧会は実に多種多様です。「ミロ展」などの世界の名品に出会える特別展、都美主催の現代美術展、そして芸大、美大などの卒業制作展や学校教育展。中でも、公募団体展は絵画、彫刻、版画、工芸、書、写真などジャンルも豊富で、年間約230団体の展覧会が開かれていて、その一つを見るだけでも膨大な作品が出品されています。展示室に足を踏み入れて、壁面にびっしり並んだ絵画を見て、圧倒されてしまうことがあるかもしれません。限られた鑑賞時間の中で、どんな団体の何を見るのか？それが問題です。今回は、参考までに、鑑賞方法の一つをご案内します。

壁面を眺めながら、とにかく歩く！

自分の好きな作家、好きな作品を見つけること。これが一番です。とにかく展覧会を見て回ること。もとより、1点1点を全てじっくり見ることは困難です。公募団体展は多くの場合、展示室の上の方に、部屋番号が表示されていますので、その順序で歩きながらざっと壁面を「眺めて」いきましょう。散歩をするときに道端の景色や草木を眺める感覚です。タイトルや作者名は確認しません。何か「気になる作品」があったら近寄って「見て」ください。

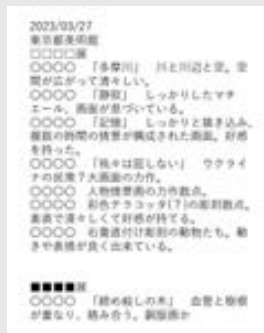
ピンときたらチェック！

作品を近くで見て、ピンときたら（肌感覚

で“いい”と感じたら)、キャプション(題箋、名札)をチェックしましょう。タイトルと作家名、そして会員、準会員、一般などの区別が書いてあります。〇〇賞という表示が付いているかもしれません。確認したら、再び作品を見てみましょう。なぜこのようなタイトルがつけてあるのか、そんなことを考えながら鑑賞して、3分眺めていても飽きない、あるいは2〜3度見直してもなお新鮮に見えるとしたら、その作品はあなたにとって「推し(人に勧めたいほど気に入っている人や物、またはその対象を指す言葉)の作品」です。さっそく、手帳などに作家名とタイトルを鉛筆でメモしてください。簡単な印象や感想が頭に浮かべば、書いておいてください。日付や場所も忘れずに。後になってたいへん役立ちます。

好きな傾向、公募団体、作家を見つける

それを続けていくと、好きな作家や作品の傾向も徐々に出てきます。少しずつ好きな団体の傾向が見えてきます。好きな公募団体をチェックして、毎年見に行く。こんな風に、眼と身体で実際に体験して好きになった作家や作品は記憶の奥深くに刻まれていきますので、自然に美術雑誌や美術



ピンときた作品
メモの一例

Example:
memo about an
intriguing artwork

関係のサイトに興味が向かうようになっていきます。情報や知識とは違って、自分の感覚や、無意識にピンときたことは忘れることがありません。アニメ、漫画、音楽などと同じだと思います。

人としゃべる、話す、聞く、書く

自分が好きな作家や傾向ができれば、それを文章にするか、誰かに話してみることをお勧めします。公募団体展を通して、作品と出会い、作家と出会い、美術好きの仲間と出会うことができれば、それに勝る喜びと学びはありません。ぜひ、一度都美に来て、自分自身の「推し」の作家、団体を見つけてみませんか？

(山村仁志)

The Museum hosts numerous exhibitions of all kinds. Among them are the Public Entry Exhibitions held in the Citizen's Galleries, which cover a rich variety of genres ranging from painting, sculpture, and print art to crafts, calligraphy, and photography. Some 230 such exhibitions are held each year, and a single exhibition displays an enormous number of works. In our limited viewing time, how to choose which one to see? The way to start is by strolling about and peeking in the exhibitions. Try looking at an entire wall as if gazing at scenery during a walk.

If among all those works, one happens to catch your interest . . . that is your chance. Read the caption and take a memo of its title and artist's name. Before long, you will just naturally acquire a favorite artist or art group. If you do find an artist or art group you like, discuss your discovery with a friend who likes art—there is no better or more joyful way to learn. By all means, visit the Tokyo Metropolitan Art Museum and discover your oshi (“fave”) artist or art group you will want to recommend to others.

(YAMAMURA Hitoshi)

2024年度 アーカイブズ資料展示 東京都美術館と佐藤慶太郎

Archives Exhibition 2024 Tokyo Metropolitan Art Museum and Sato Keitaro



1926年にさかのぼる東京都美術館の開館は、北九州の実業家、佐藤慶太郎の尽力により実現しました。西洋諸国の大都市にあるような常設美術館が待望されていたなか、「公私一如（こうしいちにょ）」を座右の銘とし、自分の財産は社会からの預かりものと考えていた佐藤は、石炭業で築いた財を世に還元すべく、美術館建設費となる100万円（現在のおよそ40億円に相当）を東京府に寄付します。日本で最初の公立美術館のあゆみはこうして始まりました。佐藤はまた、学校や病院、生活訓練所などの設立に尽力し、社会奉仕に人生をささげたことでも知られます。

昨年度のアーカイブズ資料展示では、佐藤慶太郎から東京府に宛てた寄付願の文書や開館

当時の写真、健康増進に関心を寄せた佐藤が創立した佐藤新興生活館の印刷物など、佐藤にまつわる資料を展示しました。社会奉仕に人生をささげた篤志家の功績と志を紹介するとともに、2026年に開館100周年を迎える東京都美術館の原点を振り返る機会となりました。

（東京都美術館 学芸員 小林明子）



The Tokyo Metropolitan Art Museum's founding, in May 1926, was realized through the efforts of Kitakyushu industrialist SATO Keitaro. Sato, whose creed was Koshi-ichinyo (Harmony between the individual and society), believed that his fortune was entrusted to him by society. Aware of the nation's yearning for a permanent art museum like those in major Western cities and desiring to return to society his great fortune built in the coal industry, he donated one million yen to Tokyo Prefecture for a museum's construction. Thus began the history of Japan's first public art museum. Sato is also known for his efforts to establish schools, hospitals, and life training centers, and for dedicating

his life to community service.

The fiscal 2024 Archives Exhibition featured materials related to Sato Keitaro, including his letter to Tokyo Prefecture conveying his wish to donate funds. Also displayed were photos from that time of the museum's opening, and printed matter from the Sato New Life Hall founded by Sato for the advancement of public health. Besides introducing the achievements and aspirations of a philanthropist who devoted his life to social service, the exhibition also became an opportunity to remember the origins of the Tokyo Metropolitan Art Museum, which will mark its 100th anniversary in 2026.

(KOBAYASHI Akiko, Curator)

TOPICS

*The New Museum
Building
greet its 50th year*
新館誕生から50年



前川國男のディテールへのこだわりと 数々の職人技も見どころです

A must see—MAYEKAWA Kunio's fine concern for detail and the exquisite skills of craftsmen

東京都美術館の現在の建物は“新館”とも呼ばれ、建築家・前川國男の設計により1975年9月に竣工しました。今から50年前になります。階段の手すり^{たもと}は、和服の袂が引かからないように連続した緩やかな作りになっているなど、当時の世相を感じさせるデザインも見られます。

正門からエスカレーターを降りた中庭は、重厚なつくりのアーチが館内へと誘います。アーチ表面のザラザラした質感は、ノミなどで叩いて削る“はつり加工”が施され、凸凹は、職人の手作業で生み出されたものです。

美術館内にも前川國男のこだわりはギュッと詰まっています。公募棟の青、黄、緑、赤の壁面や、カラフルな色のスツールが置かれています。「建築家にならなかったら、ペンキ屋さんになりたかった」というエピソードもあるほど、カラフルはキーワードの一つです。

館内の天井を見上げると、アーチ状の“かまぼこ天井”と呼ばれる、インド砂岩のピンク色の天井が空間を彩っています。多くの職人が関わった中、1975年と2012年の大規模改修工事と親子二代にわたって美術館建築を支えた職人たちもいます。ほかにも前川國男が“トンビ”と呼んだY字型の手すりや、おむすび型の階段やカウンター、テーブル……、見どころ満載です。夏休みの自由研究にもいかがでしょう。

(東京都美術館 管理係 進藤美恵子)

This year marks 50 years since the Tokyo Metropolitan Art Museum's New Building was completed from a design by architect MAYEKAWA Kunio in September 1975. The architect's attention to detail is visible both in and outside the museum building. Inside are colorful blue, yellow, green, and red walls and stools. Looking up at the ceiling, we see arched vault ceilings and “hatsuri” arches that craftsmen hammered and chiseled by hand. Highlights abound. They include Y-shaped handrail balusters, referred to as tonbi (spread kite wings) by Mayekawa, and triangular omusubi (rice ball-shaped) stairs, counters, and tables. Visitors are invited to freely observe such details. (SHINDO Mieko, Management Section)

菊寿堂いせ辰 代表取締役

高橋元人さんTAKAHASHI Gento
(president of Isetatsu)

下町の風情を残しつつ、最先端の店も軒を連ねる上野界限。
今回は老舗版元として江戸千代紙を守り続けている
「いせ辰」のご主人がまちの魅力を紹介します。

The Ueno area features many trendy shops while retaining the mood of Tokyo's old downtown quarter.

This time, the owner of "Isetatsu," a print shop of long history known for its colorful Edo chiyogami (printed Japanese paper), introduces us to the district's charms.



創業161年、いせ辰が手掛ける絵柄は約1000種類。老舗版元として「人様の真似をしない、という先代から受け継いだ精神を守りながら、千代紙、和文具、工芸品など常時約300品目扱っています。竹久夢二先生にデザインしてもらった千代紙なども今なお店頭に並んでいますよ」と話すのは、現在のれんを守る高橋元人さん

During its 161 years, Isetatsu has created some 1,000 different print designs. "While adhering to our founding spirit as a long-established shop—that of not imitating others," says Takahashi Gento, who currently oversees the shop, "we handle some 300 items such as chiyogami paper, Japanese stationery, and crafts. Chiyogami designed by poet and painter Takehisa Yumeji is still on our shelves."

ゴッホ作品とのご縁を大切に 版元として江戸千代紙の世界を伝えます

Valuing our connection with Van Gogh's works, we as a publisher transmit Edo chiyogami to the world

和紙に様々な模様を木版手摺りして作る、江戸千代紙。いせ辰は、その版元として初代が江戸末期に創業しました。以来、錦絵（多色摺りの浮世絵版画）、おもちゃ絵（子どもの手遊び向き木版画）、千代紙細工、紙ナプキンの制作・販売と、次々に商売を発展させていきました。

こういった作品は海外へも輸出され、和紙に江戸風俗や名所を手摺りしたちりめん浮世絵（皺加工が施された錦絵）やナプキンは鑑賞用として、また菓子や土産ものの包装紙として、明治期に欧州へ渡りました。

そんないせ辰が危機に陥ったのが関東大震

災。命綱の版木がほぼ焼失してしまったのです。それでも3代目、4代目が職人らと力を合わせ、工場に残っていた千代紙や錦絵の版下から版木を復元してくれたおかげで今があります。

当店にはご近所さんはじめ、近くのお寺の檀家さんやお墓参りの方が立ち寄ってくださることが多いですね。海外、特に欧州からのお客様も多く、千代紙や錦絵に相当詳しい方もいらして、「これは山桜の版木ですね」など、驚くような知識を披露されることも。武士の鎧の甲冑模様から起こした大名千代紙などが人気です。

欧州といえば、浮世絵や日本画は印象派や

ポスト印象派の画家たちに大きな影響を与えたんですね。オランダのファン・ゴッホ美術館にはゴッホ自身が集めていた浮世絵が何点も収蔵されて、その中にはいせ辰が制作した千代紙、ちりめん絵もあるとか。20数年前、研究者の方からその報告を受けた母はたいそう驚いたそうです。とりわけ、代表作のひとつ《タンギー爺さん》に、いせ辰のちりめん絵の一部が描かれていたと聞き、実際にその絵を拝見したときには感慨深いものがありました。

そういったご縁もあって、ゴッホの作品がみられる時は必ず足を運んでいます。東京都美術館で開催された「ゴッホ展——響きあう魂 ヘレネとフィンセント」（2021年）も拝見しました。ゴッホの展覧会ではいつも何か発見があり、圧倒的な熱量と力強い筆の運びに魅入られます。秋に開催される「ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢」は新たな切り口ですし、また何か発見できるのではないかと楽しみにしています。

ゴッホはとても人気なので、大勢の方が上野に来られると思います。その際、谷中にも足を伸ばしてくださいと嬉しいです。私はこの地で生まれ育ちましたが、寺町と呼ばれるほどお寺が多い谷中という土地柄、いつも同じクラスに2人ぐらいお寺の子がいて、寺や墓地で遊ぶのが日常でした。そんな私が皆さんにお勧めしたいのは、幕末から明治にかけて活躍した河鍋暁斎

という絵師が眠っている瑞輪寺です。いせ辰で河鍋先生の作品を扱っているので時折お墓参りをさせていただくのですが、この境内、特に河鍋先生のお墓から後ろを振り返ると、見渡す限りの青空が広がっているんです。あの光景をぜひ皆さんにも見ていただきたいです。

谷中は昔ながらの景観が守られている貴重なまちで、数ある路地は魅力のひとつです。ぜひスマホをバッグに閉まって路地歩きを楽しんでいただきたい。「この道、どこにつながっているんだろう」とワクワクしながら縦横無尽に散策するのは楽しいものですよ。



「吉原つなぎ」文様の千代紙。中央がハートのように見えるのがいせ辰独自の柄

Chiyogami with a “Yoshiwara Tsunagi” pattern. The hearts appearing in the center are an Isetatsu design

縁起ものの江戸犬張子も人気商品の一つ。犬はお産が軽いことから、安産祈願や出産祝いとして買い求める人も

The auspicious Edo Inuhariko papier-mâché dog is also a popular item. Since dogs have an easy birth, some people buy them in prayer for a safe birth or as a baby gift



Isetatsu was founded as a printer of Edo *chiyogami* in the mid-19th century. Its product line quickly expanded to include *nishiki-e* (multicolored) and *omocha-e* (children's toy) woodblock prints, and paper napkins. Our *chirimen* (crinkled paper) ukiyo-e prints and napkins, hand-printed with Edo customs and famous places on Japanese paper, were also transmitted to Europe at the turn of the century.

Besides our local clientele, we receive many overseas customers, especially people arriving from Europe, some of whom display a surprising degree of knowledge. “This is a *yamazakura* (mountain cherry blossom) pattern,” they will know, for example.

Speaking of Europe, ukiyo-e and Japanese paintings had a great influence on the Impressionist and Post-Impressionist painters. The Van Gogh Museum in the Netherlands preserves ukiyo-e prints collected by Van Gogh, some of which were printed by Isetatsu,

it seems. I was surprised to learn that his painting *Portrait of Père Tanguy* depicts part of a *chirimen* print produced by our shop.

Because of this history, I always go to exhibitions of Van Gogh's works and am looking forward greatly to “Van Gogh's Home: The Van Gogh Museum. The Painter's Legacy, the Family Collection, the Ongoing Story,” scheduled to open at the Tokyo Metropolitan Art Museum this fall, because it presents an entirely new perspective.

When you come to Ueno for an exhibition such as Van Gogh, be sure to take in Yanaka, as well. As someone born and raised in this area, I want to recommend Zuirinji Temple where the grave of painter Kawanabe Kyosai is located. Turning to look behind you from the temple compound, especially by Kawanabe's grave, you can see blue sky that stretches to the horizon. I would like everyone to experience that scenery.

東京都美術館の開館20周年記念式典は戦争の影響により、周年にあたる1945年から遅れ1947年に開催されました。戦時中の美術館では従軍画家が描いた戦争記録画の展覧会が開かれるようになり、やがて戦況が悪化し統制が進むと定期的に開催されていた一般公募展は全て中止され、多くの美術団体が解散を余儀なくされました。戦後ほどなく美術団体が相次いで再建するなか、20周年記念式典に合わせて朝日新聞社と共同で開催した「新憲法実施並ニ美術館開館二十周年記念現代美術総合展覧会」では、芸術院会員、各団体の委員、会員など招待出品による日本画、洋画、彫刻、工芸の作品914点が美術館全館を使用して展示されました。

(米岡響子)



開館20周年記念式典風景 1947年撮影

The Tokyo Metropolitan Art Museum's 20th anniversary ceremony. Photo dated 1947

Due to war, the Tokyo Metropolitan Art Museum's 20th anniversary ceremony was held in 1947, two years after the actual anniversary year, 1945. At the "Modern Art Exhibition Jointly Commemorating the New Constitution and the Museum's 20th Anniversary" held in conjunction with the 20th anniversary ceremony, 914 works of Nihonga (Japanese painting), Western style painting, sculpture, and crafts, exhibited through invitation by Art Academy members and committee members of various art groups, were displayed throughout the museum. (YONEOKA Kyoko)

東京都美術館 ニュース No.481

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

発行日 2025年7月31日
発行 東京都美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)
企画・編集 東京都美術館 広報担当
デザイン 株式会社ファントムグラフィックス
翻訳 アムスタッツ コミュニケーションズ
印刷 望月印刷株式会社

©Tokyo Metropolitan Art Museum

* 最新情報は公式サイトで
ご確認ください



* バックナンバーは
こちら



東京都美術館

〒110-0007

東京都台東区上野公園8-36

Tel 03-3823-6921

Fax 03-3823-6920

公式サイト

<https://www.tobikan.jp>

X (旧Twitter)

tobikan_jp tobikan_en

Facebook

TokyoMetropolitanArtMuseum

Instagram

tokyoumetropolitanartmuseum

YouTube

@tokyoumetropolitanartmuseum7280

表紙の 作品

フィンセント・ファン・ゴッホ《画家としての自画像》(部分)

1887年12月-1888年2月

ファン・ゴッホ美術館、

アムステルダム (フィンセント・ファン・ゴッホ財団)

Vincent van Gogh, *Self-Portrait as a Painter* (detail),

December 1887-February 1888

Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

